

萬葉百首選

中村鳥堂著

特241

236

月明
文庫



始



特241
236



百
首
選

中
村
烏
堂
著



文
庫



岡本天皇舒明天皇御製歌

暮去者 小倉乃山爾 鳴鹿者 今夜波不鳴
寢宿家良思母

夕されば 小倉の山に 鳴く鹿は こよひ
は鳴かず いねにけらしも (二五二)

中大兄天智天皇御歌二首

高山與 耳梨山與 相之時 立見爾來之 伊
奈美國波良

かぐ山と 耳梨山と あひし時 立ちて見
にこし 印南國原 (二四)

渡津海乃 豊旗雲爾 伊理比沙之 今夜月夜
清明己曾

わたつみの とよはた雲に 入日さし こ
よひのつくよ きよらかにこそ (二五)

天武天皇幸于吉野宮時御製歌

淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見與
良人四來三

よき人の よしとよく見て よしと言ひし
よしぬよく見よ よき人よく見つ (二七)

持統天皇御製歌

春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有 天之香
來山

春すぎて 夏來るらし 白たへの 衣ほし
たり 天の香具山 (二八)

和銅元年戊申元明天皇御製歌

大夫之 輶乃音爲奈利 物部乃 大臣 楯立
良思母

ますらをの 輶の音すなり ものゝふの
おほまへつぎみ 楯立つらしも (二九)

御名部皇女奉^レ和御歌

吾大王 物莫御念 須賣神乃 嗣而賜流 吾
莫勿久爾

わが大君 物なみもほし すめ神の 嗣ぎ
て賜へる われなけなくに (七七)

幸ニ行於山村之時先太上天皇 元正天皇 詔^レ陪從王卿等宜賦^ニ和歌^ニ而奏^ト即御口號曰

安之比奇能 山行之可婆 山人乃 和禮爾依

志米之 夜麻都刀曾許禮

あしびきの 山ゆきしかば 山人の われ
によしめし 山苞ぞこれ (四二九二)

舍人親王應^レ 詔奉^レ和御歌

安之比奇能 山爾由伎家牟 夜麻妣等能 情

母之良受 山人夜多禮

あしびきの 山にゆきけむ 山人の こゝ
ろも知らず 山人や誰 (四二九三)

聖武天皇御製歌二首

大夫之 去跡云道曾 凡可爾 念而行勿 大
夫之伴

ますらをの ゆくといふ道ぞ おほろかに
おもひてゆくな ますらをの伴 (九七四)

今朝乃且開 鴈之鳴寒 聞之奈倍 野邊能淺
茅曾 色付丹來

けさのあさけ かりがねさむく きゝしな
へ 野べの淺茅ぞ 色付にける (一五四)

孝謙天皇御製歌

四舶 早還來等 白香著 朕裳裾爾 鎮而將
待

四つのふね 早かへりこと しらがづく
わが裳のすそに しづめて待たむ (四二六五)

額田王歌

焚田津爾 船乗世武登 月待者 潮毛可奈比
奴 今者許藝乞菜

にぎたづに 船のりせむと 月待てば し
ほもかなひぬ 今は漕出でな (八)

中皇命往于紀伊温泉之時御歌

吾欲之 野島波見世追 底深伎 阿胡根能浦
乃 珠曾不拾

吾欲りし 野島は見得つ 底ふかき あこ
ねの浦の 珠ぞひりはね (一三)

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌

東野炎立所見反見爲者月西渡

ひむかしの野にかぎろひの立つ見えて
かへり見すれば月かたむきぬ (四八)

坂門人足作歌

巨勢山乃列列椿都良都良爾見乍思奈

許湍乃春野乎

こせ山のつらつら椿つらつらに見つ
思ふなこせの春野を (五四)

譽謝女王作歌

流經妻吹風之寒夜爾吾勢能君者獨香

宿良武

ながろふる棲吹く風の寒き夜に吾背
の君はひとりかぬらむ (五九)

長田王作歌

浦佐夫流情左麻禰之久堅乃天之四具禮

能流相見者

うらさぶるこゝろ洽ねし久方の天の
時雨の流ろふ見れば (八二)

長皇子與志貴皇子於佐紀宮俱宴歌

秋去者 今毛見如 妻戀爾 鹿將鳴山曾 高

野原之字倍

秋されば 今も見るごと 妻ごひに 鹿鳴

かむ山ぞ 高野原の上 (八四)

幸于吉野宮時弓削皇子贈與額田王歌

古爾 戀流鳥鴨 弓絃葉乃 三井能上從 鳴

渡遊久

いにしへに こふる鳥かも 弓絃葉の 御

井の上より 鳴わたりゆく (一一一)

額田王奉和歌

古爾 戀良武鳥者 霍公鳥 盖哉鳴之 吾戀

流其騰

古に こふらむ鳥は ほとゝぎす けだし

や鳴きし わがこふるごと (一一三)

有馬皇子自傷歌

家有者 筥爾盛飯乎 草枕 旅爾之有者 椎

之葉爾盛

家にあれば 筥にもる飯を 草まくら 旅

にしあれば 椎の葉に盛る (一一四)

天智天皇聖躬不豫之時太后倭姬王奉御歌
天原 振放見者 大王乃 御壽者長久 天足
有

天の原 振さけ見れば 大君の 御いのち
は長く 天たらしたり (二四七)

鴨君足人香具山歌

人不榜 有雲知之 潜爲 鴛與高部共 船上
住

人こがず あらくもしるし かづきする
鴛鴦と鴈カケと 船の上に住む (二五八)

柿本朝臣人麿從近江國上來時至宇治河邊作歌

物乃部能 八十氏河乃 阿白木爾 不知代經
浪乃 去邊白不母

ものゝふの 八十氏川の 網代木に いざ
よふ浪の ゆくへ知らずも (二六四)

長屋王故郷御歌

吾背子我 古家乃里之 明日香庭 乳鳥鳴成
君待不得而

吾背子が 古家の里の あすかには ちど
り鳴くなり 君待ちかねて (二六八)

石川女郎歌

然之海人者 軍布苧鹽燒 無暇 髮梳乃小櫛
取毛不見久爾

資訶の海女は めかりしほやき いとまな
みくしげの小櫛 とりも見なくに (三七八)

山部宿禰赤人望不盡山歌

田兒之浦從 打出而見者 眞白衣 不盡能高
嶺爾 雪波零家留

田子の浦ゆ 打出で、見れば 眞白にぞ
ふじの高根に 雪はふりける (三七七)

笠朝臣金村詠不盡山歌

不盡嶺爾 零置雪者 六月 十五日消者 其
夜布里家利

ふじがねに ふりおける雪は 水無月の
もちに消ぬれば その夜ふりけり (三三〇)

太宰少貳小野老朝臣歌

青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薰如 今盛
有

青丹よし 奈良の都は 咲花の にほふが
ごとく 今さかりなり (三二八)

帥大伴卿歌

浅茅原 曲曲二 物念者 故郷之 所念可聞
あさぢ原 つばらくに 物もへば ぶり
にし里し おもほゆるかも (三三三)

沙彌滿誓詠綿歌

白縫 筑紫乃綿者 身著而 未者伎禰杼 暖
所見
しらぬひの つくしの綿は 身に著けて
いまだはきねど 暖かに見ゆ (三四六)

太宰大伴卿讚酒歌

驗無 物乎不念者 一坏乃 濁酒乎 可飲有
良師
しるしなき 物をおもはずは 一つぎの
濁れる酒を 飲むべくあらし (三三八)

湯原王芳野作歌

吉野爾有 夏實之河乃 川余杼爾 鴨曾鳴成

山影爾之氏

よしぬなる なつみの川の 川よどに 鴨
ぞ鳴くなる 山かげにして (三七五)

額田王作歌

君待登 吾戀居者 我屋戸之 簾動之 秋風
吹

君待つと 吾こひをれば わがやどの 簾
うごかし 秋の風ふく (四八八)

鏡王女作歌

風乎太爾 戀流波乏之 風小谷 將來登時待
者 何香將嘆

風をだに こふるはともし 風をだに 來
むとし待たば 何かなげかむ (四八九)

阿部女郎歌

吾背子之 盖世流衣之 針目不落 入爾家良
之 我情副

吾背子が 著せる衣の 針目おちず 入り
にけらし わがこゝろさへ (五一四)

山上憶良戀男子名古日歌

和可家禮婆 道行之良士 末比波世武 之多
弊乃使 於比呂登保良世

わかければ 道ゆき知らじ まひはせむ
したべのつかひ 負ひてとほらせ (九〇五)

神龜元年甲子多十日幸三干紀伊國時山部宿禰赤人作歌

若浦爾 鹽滿來者 滷乎無美 葦邊乎指天

多頭鳴渡

和歌の浦に 潮満ちくれば 鴻をなみ 葦
べをさして たづ鳴き渡る (九一九)

山部宿禰赤人作歌

烏玉之 夜乃深去者 久木生留 清河原爾

知鳥數鳴

うばたまの 夜のふけゆけば 楸生ふる
清き河原に ちどりしばなく (九二五)

六年甲戌海犬養宿禰岡麿應 詔歌

御民吾 生有驗在 天地之 榮時爾 相樂念
者

みたみわれ 生けるしるしあり 天地の
さかゆるるときに あへらく思へば (九九六)

志貴皇子權御歌

石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春爾

成來鴨

いはばしる 垂見の上の 早蕨の 萌出る
春に なりにける鴨 (一四一八)

高田女王歌

山振之 咲有野邊乃 都保須美禮 此春之雨
爾 盛奈利鷄利

山吹の 咲きたる野への つぼすみれ こ
の春の雨に 盛なりけり (一四四四)

穗積皇子御歌

今朝之旦開 鴈之鳴聞都 春日山 黄葉家良
思 吾情痛之

けさのあさけ 鴈がねきゝつ 春日山 も
みぢにけらし 吾こゝろいたし (一五二三)

藤原宇合卿歌

我背兒乎 何時曾且今登 待苗爾 於毛也者
將見 秋風吹

我せこを いつぞ今かと 待つなへに 面
やは見えむ 秋の風ふく (一五三五)

中臣朝臣宅守歌

家布毛可母 美也故奈里世婆 見麻久保里
爾之能御馬屋乃 刀爾多豆良麻之

今日もかも 都なりせば 見まく欲り 西
のみまやの 戸に立てらまし (三七七六)

大伴宿禰家持作歌

多知夜麻爾 布里於家流由伎乎 登己奈都爾
見禮杼母安可受 加武賀良奈良之
立山に ふりおける雪を 常夏に 見れど
もあかず 神柄ならし (四〇〇一)

姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴宿禰家持歌

可多於毛比遠 宇萬爾布都麻爾 於保世母天
故事部爾夜良波 比登加多波牟可母
片思を 馬に山に おほせもて 越へにや
らば 人片はむかも (四〇八一)

賀陸奥國出金 詔書歌

須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流
美知能久夜麻爾 金花佐久
すめろぎの 御代さかえむと 東なる み
ちのく山に くがね花咲く (四〇九七)

從三位文屋智奴麻呂真人作歌

天地與 久萬氏爾 萬代爾 都可倍麻都良牟
黒酒白酒乎
天地と 久しきまでに 萬代に つかへ奉
らむ くらきしろきを (四二七五)

兵部少輔大伴宿禰家持獨憶_三秋野_二聊述_三拙懷_二作之

麻須良男乃 欲妣多天思加婆 左乎之加能

牟奈和氣由可牟 安伎野波疑波良

ますらをの よび立てしかば 棹鹿の 胸

分けゆかむ 秋野萩原 (四三〇)

明日之夕 將照月夜者 片因爾 今夜爾因而

夜長有

明日ゆふべ 照らむ月夜は 片よりに 今

よひに因りて 夜長からなむ (四三二)

足引乃 山河之瀬之 響苗爾 弓月高 雲立
渡

足引の 山川の瀬の なるなへに 弓月が
たけに 雲立わたる (四三八)

黒玉之 夜去來者 卷向之 川音高之母 荒
足鴨疾

うばたまの 夜のさりくれば 卷向の 川
とたかしも あらしかも疾き (四四〇)

大王之 御笠山之 帶爾爲流 細谷川之 音
乃清也

大王の 御かさの山の 帯にせる 細谷川
の 音のさやけさ (11011)

佐保河之 清河原爾 鳴知鳥 河津跡二 忘
金都毛

佐保河の 清き河原に 鳴く千鳥 蛙と二
つ 忘れかねつも (11111)

琴取者 嘆先立 盖毛 琴之下樋爾 婦哉匿
有

琴とれば なげき先立つ けだしくも 琴
の下ひに つまやかくる、 (11119)

暇有者 拾爾將往 住吉之 岸因云 戀忘貝
いとまあらば 拾ひにゆかむ 住のえの
岸に因るちふ 戀忘貝 (11147)

人在者 母之最愛子曾 麻毛吉 木川邊之
妹與背之山

人ならば 母がまなごぞ あさもよし 紀
の川のべの 妹と背の山 (二二〇九)

匣 見諸戸山矣 行之鹿齒 面白四手 古
所念

玉くしげ みもろど山を ゆきしかば お
もしろくして いにしへおもほゆ (二二四〇)

天平五年癸酉遣唐使船發難波入海之時親母贈子歌

客人之 宿將爲野爾 霜降者 吾子羽裘

天乃鶴群

たび、との やどりせむ野に 霜ふらば

わが子羽ぐ、め 天のたづ群 (一七九〇)

久方之 天芳山 此夕 霞霏霰 春立下

久方の 天の香具山 このゆふべ 霞たな

びく 春たつらしも (一八三三)

春霞 流共爾 青柳之 枝啄持而 鶯鳴毛

はるがすみ 流るゝむたに 青やぎの 枝
くひもちて うぐひす鳴くも (一八三二)

峯上爾 零置雪師 風之共 此間散良思 春

者雖有

みねの上に ふりおける雪し 風のむた
こゝにちるらし 春にはあれども (一八三八)

爲君 山田之澤 惠具採跡 雪消之水爾 裳
裾所沾

君がため 山田の澤に 惠具つむと 雪消
の水に 裳のすそぬれつ (一八三九)

能登河之 水底并爾 光及爾 三笠之山者
咲來鴨

のとかはの みなそこ花に てるまでに
三笠の山は 咲きにけるかも (一八六一)

川津鳴 吉野河之 瀧上乃 馬醉之花曾 置
未勿勤

蛙鳴く 吉野の河の 瀧がみの あしびの
花ぞ 土におくなゆめ (二八六八)

吾衣 於君令服與登 霍公鳥 吾乎領 袖爾
來居管

わが衣を 君に著せよと ほとゝぎす 吾
をしりする 袖に來ゐつゝ (二九六一)

我勢古波 幸座 遍來 我告來 人來鴨
わがせこは さきくいますと まねく來て
吾に告來む 人の來ぬかも (二三八四)

玉響 昨夕 見物 今朝 可戀物
かつくに きのふのゆふべ 見しものを
けふのあしたに 戀ふべきものか (二三九一)

劔刀 諸刃利 足踏 死死 公依
つるぎたち 諸刃のとがり 足ふみて 死
は死ぬとも きみによりては (二四九八)

佐保乃内從 下風之吹禮者 還者 爲便胡粉
歎夜衣大寸

佐保の内ゆ あらしの吹ければ 還りては
せむすべ知らに 嘆く夜ぞ多き (二六七七)

山振之 爾保徹流妹之 翼醋色乃 赤裳之爲
形 夢所見管

山吹の にほへる妹が はねず色の あか
ものすがた 夢に見えつゝ (二七八六)

莫去跡 變毛來哉常 顧爾 雖往不歸 道之
長手矣

なゆきぞと 變りも來やと かへりみに
往けども歸らず 道の長手を (三三三三)

式島乃 山跡乃土丹 人二 有年念者 難可
將嗟

敷島の やまとのくにに 人ふたり あり
としもはゞ 何かなげかむ (三三四九)

安積香山 影副所見 山井之 淺心乎 吾念
莫國

右歌傳云。葛城王遣_二于陸奥國_一之時。國司祇承緩
怠異甚。於時王意不_レ悅。怒色顯_レ面。雖_レ設_二飲饌_一。不_二肯

宴樂。於是_二有_二前采女_一。風流娘子。左手捧_レ觴。右手持_レ
水。擎_二之王膝_一。而詠_二其歌_一。爾乃王意解脫。樂飲終日。
淺香山 影さへ見ゆる 山の井の 淺き心
を わが思はなくに (三八〇七)

詠玉箒鎌天木香棗歌
玉箒 苺來鎌麻呂 室乃樹與 棗本 可吉將
掃爲

玉ははき 刈り來鎌まる むろの木と な
つめがもとを かきはかむため (三八三〇)

詠_三白鷺啄木飛_二歌

池神 力士儼可母 白鷺乃 梓啄持而 飛渡

良武

池の神 力士まひかも 白さぎの ほこく
ひもちて とびわたるらむ (三八三二)

無_三心所_レ著歌

吾妹兒之 額爾生流 雙六乃 事負乃牛之

倉上之瘡

わきもこの 額に生ふる 双六の ことひ
の牛の くらの上のくさ (三八三八)

夏影 房之下邇 衣裁吾妹 裏儲 吾爲裁者

差大裁

夏かげの 茂^オきが下に 衣たつ吾妹 心^{ウラ}傾^{マケ}
て 吾が爲裁たば やゝ大に裁て (二二七八)

橋立 倉椅山 立白雲 見欲 我爲苗 立白
雲

橋立の 倉椅山に 立てる白雲 見まほ
り 吾がするなへに 立てる白雲 (二二八三)

青角髮 依網原 人相鴨 石走 淡海縣 物
語爲

青みづら よさみが原に 人にあはぬかも
石はしる 淡海縣アガタの 物語せむ (二二八七)

丸雪降 遠江 吾跡川楊 雖刈 亦生云 余
跡川楊

霰ふり 遠つあふみの あと川楊 刈れ、
ども 亦も生ふちふ あと川楊 (二二九三)

天在 一棚橋 何將行 稗草 妻所云 足莊
巖

天なる 一つ棚橋 いかにか行かむ 若草の
妻がりといへば 足ゆゆかまし (二二六二)

奈都素妣久 宇奈加美我多能 於岐都渚爾
布禰波等杼米牟 佐欲布氣爾家里

なつそひく 海上瀉の 沖つ渚に 船はと
ゝめむ 小夜ふけにけり (三三四八)

信濃奈流 須賀能阿良野爾 保登等藝須 奈
久許惠伎氣婆 登伎須疑爾家里

信濃なる 菅の荒野に 杜鵑 鳴聲きけば
節ふしすぎにけり (三三五)

波奈治良布 己能牟可都乎乃 乎那能乎能
比自爾都久麻提 伎我與母賀母

花散らふ この向つ丘の を那の丘の 比
自よにつくまで 君が世もがも (三四八)

相模國助丁丈部造人麻呂

於保伎美能 美許等可之古美 伊蘇爾布理
宇乃波良和多流 知知波波乎於伎豆

大君の 命畏み 石にふり うのはら渡る
父母をおきて (四三三八)

駿河國丈部稻麻呂

知知波波我 可之良加伎奈豆 佐久安禮天
伊比之古度婆曾 和須禮加禰津流

父母が 頭かきなで さくあれて いひし
ことばぞ わすれかねつる (四三四六)

上總國武旆郡上丁丈部山代

余曾爾能美 美豆夜和多良毛 奈爾波我多
久毛爲爾美由流 志麻奈良久奈爾

よそにのみ 見てや渡らも 難波潟 雲井
に見ゆる 島ならなくに (四三五)

下野國火長今奉部與曾布

祁布與利波 可徹里見奈久豆 意富伎美乃
之許乃美多豆等 伊埜多都和例波

今日よりは かへりみなくて 大君の し
この御楯と いでたつわれは (四三七)

下野國火長物部眞島

麻都能氣乃 奈美多流美禮婆 伊波妣等乃
和例乎美於久流等 多多理之母己呂

松の木ノの 並みたる見れは 家人の われ
を見送ると 立たりし如 (四三七五)

下野國梁田郡上丁大田部三成

奈爾波刀乎 己伎埜豆美例婆 可美佐夫流
伊古麻多可禰爾 久毛曾多奈妣久

難波門を 漕出て見れば 神さぶる 膽駒
高根に 雲ぞたなびく (四三八〇)

下總國海上郡助丁海上國造他田日奉直得大理

阿加等伎波 加波多例等枳爾 之麻加枳乎

己枳爾之布禰之 他都枳之良受母

あかときの 彼誰時に 島影を 漕ぎにし

船の たづき知らずも (四三八四)

信濃國國造少縣郡田舍人大島

可良己呂茂 須曾爾等里都伎 奈苦古良乎

意伎呂曾伎怒也 意母奈之爾志呂

唐衣 すそにとりつき 泣く子らを おき

てぞ來ぬや 母なしにして (四四〇一)

武藏國那訶郡上丁檜前舍人石前之妻大伴眞足母

麻久良多之 己志爾等里波岐 麻可奈之伎

西呂我馬伎己無 都久乃之良奈久

枕太刀 腰に取佩き まがなしき 背呂が

まき來む 時の知らなく (四四一三)

武藏國橘樹郡上丁物部眞根

伊波呂爾波 安之布多氣騰母 須美與氣乎

都久之爾伊多里豆 古布志氣毛波母

いはろには 蘆火たけども 住よきを つ

くしにいたりて こふしけもはも (四四一九)

昔人防人歌三首

佐岐母利爾 由久波多我世登 刀布比登乎

美流我登毛之佐 毛乃母比毛世受

防人に ゆくは誰背と 問ふ人を 見るが

乏しさを 物思もせず (四四二九)

宇麻夜奈流 奈波多都古麻乃 於久流我辨

伊毛我伊比之乎 於伎豆可奈之毛

厩なる 繩斷つ駒の 遅くるかへ 妻が縛

ひしを おきて悲しも (四四二九)

夜未乃欲能 由久佐岐之良受 由久和禮乎

伊都伎麻左牟等 登比之古良波母

闇の夜の 行先しらず ゆくわれを いつ

來まさむと とひし子らはも (四四三六)

萬葉百首小解

(一五二) 暮去者 小倉乃山爾 鳴鹿者 今夜波不鳴 宿
寢家良思母

舒明天皇の御製、九卷には雄略天皇御製歌として同じ歌出づ、鳴鹿者が臥鹿之となりてゐる、鳴鹿者がよく、やはり舒明天皇と見るべきであらう。小倉は小椋とも、亦卷九に龍田山の瀧上の小鞍とあるのでこの山ならむといはれてゐる、この小倉の山に毎夜鳴く鹿が今夜は聲がしない、さては鳴かずに寝たか。妻戀に鳴くの聯想もあつて、あはれ深い御歌である。

(一五) 高山與 耳梨山與 相之時 立見爾來之 伊奈
美國波良

中大兄の大和三山歌の反歌、畝火山と耳梨山が香具山を妻に争つた、其時出雲の阿保大神が中に入らうと大和に上られたが播磨の印南野まで来て争が終つたと聞き出雲へ引還したといふ神話

がある、御歌は其事に觸れてゐるが、この御歌にどこか昔の歌謡時代の匂がしてゐる。歌謡では古昔にあつたこともさながら身邊にありしことの如く謡ふのであつた。

(二六) 渡津海乃 豊旗雲爾 伊理比沙之 今夜月夜 清
明己曾

これも中大兄三山歌の反歌となつてゐるが勿論別時の御歌である。渡津海には古くは海神の意味がある。豊はゆたかとのみ説かれてゐるがこの語も神、主と並び神の觀念がある、ここでも海神の神々しき雲の旗手と解すべきである。清明己曾はアキラケクソ、一説にはマザヤカニコソ等よみてゐるが、字から見てもキヨラカニコソがよい。集中月にも山にも川にもキヨキの語を多く用ゐてゐる。解者の幼時、夕焼を猿が衣を干すといひ、猿が衣を干せば明日は晴ともいつた。御歌に似てゐるやうではほゑましい。

(二七) 淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見與 良
人四來三

天武天皇吉野宮幸の時の御製、芳野は古くはエシヌといつたやうだが、御製では他のヨシ、ヨ

キ等と合せてヨシヌとよむべきであらう。

(二八) 春過而 夏來良之 白妙能 衣乾有 天香來山

持統天皇の御製、百人一首と少し形が違ふがこの方が正しいのである。香具山を背景として夏衣を干し始めた里々の情景が美はしくあらはれてゐる。春過而夏來良之も淡くて美しい。

(七六) 大夫之 鞆乃音爲奈利 物部乃 大臣 楯立良思
母

元明天皇御即位元年の御製、次年の春には陸奥越後の蝦夷に御軍が向けられてゐるのを思ふと、この頃叛報は傳つてゐて、都の内も何となく騒々しく軍も訓練を始めてゐたので、曉の御夢を驚かす鞆の音も聞え、それが御歌に上つたと拜する、鞆は臂に著けて弓弦の反撥を受け、其時音を立てるものの如くいはれてゐるが、兵庫式の鞆の料から考へると、御歌の鞆はさやうなものでなく、今の團扇太鼓を少し小さくした如きもので、軍の訓練に相圖をなす具と思はれる、鼓の面裏は熊皮で大きさは四寸五分と五寸許、それに牛革の柄が著き、矢といつてたたく撥が附いてゐる、漆や絹糸で美しく飾り、紫表緋裏の袋に入れて携帯したものらしい、で御歌は其の鞆の音を

男しくも聞召されて、マストラヲノトモノオトスナリと仰せられ、軍部の大臣の楯を立てる状など思遣りいたはらせ玉ふ御仁慈が長くも下句となりてゐる。

(七七) 吾大王 物莫御念 須賣神乃 嗣而賜流 吾莫勿
久爾

皇妹御名部皇女和し奉り玉ひて叡慮を慰め奉り玉ふ御歌。吾大君、あまり尊慮を憫ましますな皇神たちの嗣きて賜へる御世にしあれば皇神の御加護もありて世はやがて安らけくなり申さむものを。末句の吾は御世をさし玉ふ、皇女御自身のことではない。御歌の場合、其の境地から受取らなければならぬワレである。

(四二九三) 安之比奇能 山行之可婆 山人乃 和禮爾依志
米之 夜麻都刀曾許禮

元正天皇の御製、足引のは枕詞、山を行きたれば、山人が、朕に依せるべくさせた、山苞なるぞ、で、依志米之が大切の一語である。それはよせたでなく、よせさせたである、山人が朕によせしめた、山人が朕にさせたの意、更にいへば、この御歌は御位を聖武天皇に譲り上皇になり玉

ひたる後の御製にて、山村御幸を機にかねての御思を御歌にもやし玉へりと解せられる、其の御思は山人心である、山に行つたのですつかり山人になつた。然るに御歌では其山人を別人として、其山人がすつかり朕をとらへて、朕にこの山苞を卿等に致させたど、かうみよみ玉ふたのである。

(四二九三) 安之比奇能 山爾由岐家牟 夜麻妣等能 情母
之良受 山人夜多禮

舍人親王が、詔に應じて天皇の御製に和し奉り玉へる御歌。山に往きけむ山人の心など臣等の浅慮には解しも得られず、山人といふからが何物ども、と山人にかけて簡單によまれてゐる、いひかへるならば、山人など仰せ玉ふ深き大御心の程臣等浅慮の窺ひ得る所に候はずと仰せ玉ひたることになる。

(九七四) 大夫之 去跡云道曾 凡可爾 念而行勿 大夫
之伴

聖武天皇節度使の卿等に賜酒の時御作歌の反歌、大夫の行くべき道をおろそかに思はないで行

けよと、威嚴ある御仁慈のお諭である。

(一五四) 今朝乃旦開 鴈之鳴寒 聞之奈倍 野邊能淺茅
會 色付丹來

これも聖武天皇御製歌、今朝早く鴈がねを寒く聞いたことであつたが、道理で野べの淺茅もかく色付いてゐるワイである。大らかな御歌ぶりと拜します。

(四二六四) 四舶 早還來等 白香著 朕裳裾爾 鎮而將待

從四位上高麗朝臣福信に勅して難波に遣せて入唐使藤原朝臣清河等に酒肴を賜ふ御製歌一首并短歌とある其短歌である。

四舶は四艘の船、其時遣はし賜へる船、早還來等は早く還來れよと、白香著は枕詞、下の鎮めてにかかる、卷三に白香付木縣取付而と見えて木縣にかかる枕詞であるが、ここは木縣を鎮めての中に包括し略して直ちに鎮而にかけたのである、鎮而はイハヒテともよませてゐるが、ここは字に從てシヅメテとよむ、イハヒシヅメといつて孰れにてもよし、朕が裳の裾には現人神に座せば低

めて仰せ賜ふのである。

(八) 熟田津爾 船乗世武登 月待者 潮毛可奈比奴
今者許藝乞榮

額田女王の歌、にぎたづは伊豫、船乗せむとある語調に見て、旅の船出と思はれる、月の出を待ちてといつてゐるうちに月は出て潮もよくなつた。潮もとあるので月の出たこともわかる。月待者潮毛可奈比奴はいみじき省約の叙法である。船出せむといひて、今は漕出でなと結ばれてゐる。到らぬ隈なき纖細の叙法であつて、しかも一首の調はかくも高い、まことに名手といふべきである。

(一一) 吾欲之 野島波是世追 底深伎 阿古根能浦乃
珠曾不捨

中皇命紀伊温泉に往玉ふ御歌、野島は兒島のことでもあるが孰れにせよ、附近に阿古輪の浦があればよい、この御歌では見世追が注意を引く、珠曾不捨などの書振りからいへば、見世追が若し他に見せしめたの意味なら令見追とあるべきである。しかもさうはなく、見世追とあるのは見

得つの意味だからである。得の對音語でせといふことはあり得る。東歌に忘れせなくなどあるせも得で、忘れ得なくである。御歌の意は、かねて望みてゐた野島も見得て満足であつた、底深き阿古根の浦の珠とまでは及びもつかないにしてである。だから末句も珠ぞひりはねでなければならぬ。

(四八) 東野炎 立所見 反見爲者 月西渡

柿本朝臣人麿阿騎野に宿る時の作歌、朝東の空に紅の匂ふ頃月影は淡く西の山のはに傾いてゐる。この時代には稀な叙景詩の創設であつた。

(五四) 巨勢山乃 列列椿 都良都良爾 見乍思奈 許湍
乃春野乎

大寶元年秋九月太上天皇に從駕して坂門人足の作歌、秋の日に映える列列椿に春野のよさを偲びたるもの、末句に至りて許湍乃春野乎と點出したところが手柄である。

(五九) 流經 妻吹風之 寒夜爾 吾勢能君者 獨香宿良
武

萬葉人は風にも雨にも花にも流らふるといふ、よいことばと思ふ、妻吹くは褰吹くだが衣の褰と限らない、起居の端々に觸れる風とも解すべき語である、下の句の比較的單調を補ふて上の句は繊細を極めてゐる。これは譽謝女王の歌。

(二八一) 浦佐夫流 情左麻禰之 久堅乃 天之四具禮能
流相見者

長田王の御歌、誰もが愛誦する歌である。浦佐夫流の浦は心であるが、ウラサブルといふ一語をなしてゐるから次の情につつけた、左麻禰之は阿麻禰之の對音語で同意語である。言葉には對音語といふものがあつて、同意語のこともあるれば反對の意味になることもある。情左禰之は情が胸一杯になつたといふこと、天之四具禮、天之露霜など萬葉は天の語を巧みに使ふ、味も崇高でよい。天之四具禮能流相美禮姿、實によい歌である。

(八四) 秋去者 今毛見如 妻戀爾 鹿將鳴山曾 高野原
之字倍

長皇子が志貴皇子と佐紀宮にて俱に宴しませし時の作歌、宮から高野原がづつと見はるかされ

て、野原の地平線に裾を限られた山の姿を見せてゐる。秋ならば鹿も鳴くであらうといった物さびた景觀、此御歌では今毛見如があつて一首が躍動してゐる、それに高野原の上がよい、この末句があつて鹿鳴かむ山ぞが切實に受取られる。秋去れば妻戀に鹿鳴かむ高野原の山、今見るのもそつくりだとの意味である。

(一一一) 古爾 戀流鳥鳴 弓絃葉乃 三井能上從 鳴渡
遊久

弓絃葉は地名とのこと、三井は御井、天武天皇の秋津宮附近といふのも肯ける、天皇の御子に在す弓削皇子、されば御關心のほごも思やられる、この御歌を額田女王に御贈與になつたのは道ゆく者もたぐひてぞよきのたぐひであらう。

(一二三) 古爾 戀良武鳥者 霍公鳥 蓋哉鳴之 吾戀流
其騰

額田女王の感慨、弓削皇子に劣るべきか、其鳥こそ吾魂が拔出したのなれ、吾戀ること鳴いたに相違ありませぬと返しましたのである。申すまでもなく額田王は天皇の妃におはしたのであ

る。

(一四二) 家有者 筒爾盛飯手 草枕 旅爾之有者 椎之
葉爾盛

明日を頼めぬ有馬皇子自傷作歌の中一首、他にも有名な結松の御歌がある。この御歌にはただ旅のわびしさのみがものせられてゐる、ただの旅なら木の葉に飯を盛りて食ふも一興だが、再び家に歸り得玉はぬ皇子にはたまらぬ悲しみにおはしたのである。

(一四七) 天原 振放見者 大王乃 御壽者長久 天足有

天足は天帯とも書く、天地で、天地萬物を其の意に包み、オビタダシの母語でもあつて、無限の意に連る、今はそれを天帯の字意に迎へて大君の御いのちは無限の天よりかかりておはしますとみよみました。上二句は其の天たらしにかかつてゐる。ただみいのちの無際限といふことを言葉の縁をたどりてかくみよみましたので、かかる歌の一の體ともいふべきであらう。

(二五八) 人不榜 有雲知之 潜爲流 鶯與高部共 船上
住

鴨君足人香具山の歌、一の懐古詩でもあらう。青龍展に似た畫を見るがさすが、このあはれはないやうだ、和名抄に爾雅註云、爾、和名多可倍、但し如何なる鳥か解者は存せぬ。

(二六四) 物之部乃 八十氏河乃 阿白木爾 不知代經浪
乃 去邊白不母

柿本朝臣鷹近江より上來る時宇治河邊に到りて作歌とある。近江で懐古の腸を絞つて餘燼いまださめず、この歌をなしたものであるまいか、物之部乃八十は氏河にかけた序詞で歌の筋からは用のない語だが、いざよふ浪のゆくへ知らずにも反響して哀れを深からしめてゐるやうにも見える。阿白木は網代木、流を堰止めるに造る。不知代經浪は其網代木まで來て堰止められる浪、泡を立てて沸立つ、それも次々に消去つて跡方もなくなる、世に生を享けてあかく者の姿である。

(二六八) 吾背子我 古家乃里之 明日香庭 乳鳥鳴成
君待不得而

昔は宮居は御代毎に移りたれば、宮居の跡は人家も稀な山里にかへる、明日香も其一つ、折柄冬の夜に知鳥が君待ちがほに鳴く、歌人は古を思ふと九回の腸を絞る、この歌は長屋王故郷の御

歌、渾然たる秀作である。

(三二七) 田兒之浦從 打出而見者 眞白衣 不盡能高嶺
爾 雪波零家留

誰も知らぬものなき赤人の歌、浦從の從は空間指定、ここは田子の浦に又田子の浦をなどいふに略同じ。

(三三〇) 不盡嶺爾 零置雪者 六月 十五日消者 其夜
布里家利

笠朝臣金村詠不盡山歌、赤人の不盡の天衣無縫に及ぶべくもないが、しかしともかくうまくいひ了せてゐる。夏の眞只中の一日消えたかと思ふと其夜にはもう降りて居るといふ。

(三三八) 青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薰如今盛有
太宰少貳小野老朝臣の作歌、有名な歌だが、かういふ種の歌では、うまくいひ當てたかの感があるのは餘儀ない。

(三三三) 淺茅原 曲曲二 物念者 故郷之 所念可開

まことはてしなく思出をたどりてゐると人はいつしか故郷にかへりてゐる、此歌客観性をかき、定義めく観はあるが、旅人卿にはすてがたい一首なのであらう。

(三三六) 白縫 筑紫乃綿者 身著而 未者伎禰杼 暖所見

沙彌滿誓詠綿歌 身に著けていまだはきねどの三四の手まめな描寫がよい、白縫はこの筑紫(筑前、筑後)の古名白日別の白日に挿入音ヌを介みた形である。このヌはカチをカヌチといふヌと同じく意味のないただ音便から來る音である。このヌを有意に利用したのが不知火である。

(三三八) 驗無 物乎不念者 一坏乃 獨酒手 可飲有良師

旅人卿は左手の強の者であつたが、又は愛者といふ側の仁であつたか、酒の讃歌を十首ばかりも並べてゐる。せめての記念にもと一首をあげる。モノヲオモハズハはモノヲオモフマイニハを意味する古語法である。末句アラシと言ひきらなかつたのは愛嬌だ。

(三七五) 吉野爾有 夏實之河乃 川餘杼爾 鴨曾鳴成

山影爾之底

湯原王吉野作歌 川よごに山の影が落ち鳴が一ニ點、それにしてこの歌は何となく情緒的にさこえる。

(四八八) 君待登 吾戀居者 我屋戸之 簾動之秋風吹

額田王の歌、初句につゞけ吾戀居者はちよつといひ難い名手の句と思ふ、吾戀といひ、つゞけて吾屋戸といふに、吾の重出が耳だたないのも不思議である。至人の至語なのであらう。

(四八九) 風手太爾 戀流波乏之 風小谷 將來登時待者 何香將嘆

額田王の伊呂見鏡女王の作歌、恐らく額田王の前の歌に和せられたものであらう。この女王も一時天武天皇の妃に在し、後は淋しくゐたまうたのであらう。歌意は吾は今「來むと待つ」なごいふことは忘れてしまった。戀ふなら風を戀ふといふのもよい、風をでも來むと待つのだつたらこんな嘆はしないであらうに、である。

(五一四) 吾背子之 蓋世流衣之 針目不落 伊理家良之

我情副

阿部女郎の歌 背子の著る衣の針目毎に漏れなく我情をこめておいたと思ふが、である。

(九〇五) 和可家禮婆 道行之良士 末比波世武 之多弊
乃使 於比且登保良世

子煩腦の山上憶良が愛兒名は古日を失つた時の歌、末比は心づけ、之多弊之使は黄泉の雜役ともである。

(九一九) 若浦爾 鹽滿來者 滴乎無美 葦邊乎指天 多
頭鳴渡

赤人のこれも有名な歌、滴乎無美の無美は主觀性の語であることを注意したい。

(九二九) 烏玉之 夜乃深去者 久木生留 清河原爾 知
鳥數鳴

これも赤人の名歌、久木は楸、數鳴はしきりに鳴く、これに山と海と河の歌を合せて赤人の三

大傑作であらう。

(九九六) 御民吾 生有驗在 天地之 榮時爾 相樂念者

六年甲戌海犬養宿禰岡麿應 詔歌 永遠に生命を持つ一首である。

(一四一八) 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春爾

成來鴨

志貴皇子權御歌、權の御歌でもあらうがどこかに哀調がきこえる。何か思出のおはしたではあるまいか、御歌としては早蕨の精が拔出したとや申すべき、石激も垂見も垂水として皆景と見たい。

(一四四四) 山振之 咲有野邊乃 都保須美禮 此春之雨
爾 盛奈利鷄利

高田女王の歌、下の二句のうれしい歌である。詩人はいつもかうした言葉の出る妙機にふれやうと願つてゐる。

(一五二三) 今朝之旦開 鴈之鳴聞都 春日山 黄葉家良思

吾情痛

穗積香子の御歌、聖武天皇の御製に似て御製には御製の大ききがあり、これには御製に似ぬ若さがある。末の一句針よりも痛い。

(一五三五) 我背兒手 何時且今登 待苗爾 於毛也者將見
秋風吹

藤原宇合卿の歌、戀ふる思を胸に湛へて、秋の風に向ひて、臉に浮ぶ幻の影をまちてゐる。於毛也者は幻の面である。

(二七七六) 家布毛可母 美也故奈里世婆 見麻久保里 爾
之能御馬屋之 刀爾多且良麻之

中臣朝臣宅守の歌、かく都の實景を見せてくれる歌は萬葉にさうない。

(四〇〇一) 多知夜麻爾 布里於家流由伎乎 登己奈都爾
見禮等母安可受 加武賀良奈良之

家持卿の歌、登己奈都は夏母、

(四〇八一) 可多於毛比遠 宇萬邇布都麻爾 於保世母天
故事部爾夜良波 比登加多波牟可母

姑大伴氏坂上郎女の越中守大伴宿禰家持に來贈の一首、布都麻を太馬の約言などいふは以ての外、アマタ、サハタなど一味の語である、東歌「遠家爾布須佐爾」といへるフスサもこの語の變形である。加多波牟を加豆須と一語と見るのも誤、この語はむしろ片人のカタに似、カタフは半分助力するの意、この歌少し品がよくないが坂上女郎老いて益壯なる歌力を祝する意味で取上げた。

(四〇九七) 須賣呂伎能 御代佐可延牟等 阿頭麻奈流 美
知能久夜麻爾 金花佐久

我國に始めて黄金を出したる祝歌、有名なる海行者 美都久屍 山行者 草牟須屍 大君乃 弊爾許曾死米 可弊里見波勢目——大伴の言立を收むる長歌の反歌三首中の一、大伴宿禰家持作
(四二七五) 天地與 久萬氏爾 萬代爾 都可倍麻都良牟
黒酒白酒乎

當然の事だが、一首はなくてはならない、作者は従三位文屋智奴麿真人、天平寶字年代の人である。

(四三三〇) 麻須良男乃 欲妣多天思加婆 左乎之加能 牟
奈和氣由可牟 安岐野波疑波良

家持郷、獨憶秋野六首中の一首、風韻にまされる歌、卿の代表作の一と見られよう。

(一〇七三) 明日之夕 將照月夜者 片因爾 今夜爾因而
夜長有

似た趣向の中での純なる作だ、それだけ詩趣に乏しき憾があるかも知れない。

(一〇八八) 足引乃 山河之瀬之 響苗爾 弓月高 雲立渡
爽快の雨景である。

(二〇〇一) 黒玉之 夜去來者 卷向之 川音高之母 荒足
鴨疾

淋しい里の夜がふけると共に川の音のみが高まつてくる。荒足鴨疾は餘情である。かくも末句

に餘情を加へて詩趣を高からしめる技巧が集中に多く見られる。

(二〇〇三) 大王之 御笠山之 帶爾爲流 細谷川之 音之
清也

萬葉特異の一佳調。

(二二二三) 佐保河之 清河原爾 鳴知鳥 河津跡二 忘金

都毛

才人調とでもいふか。

(二二二九) 琴取者 嘆先立 蓋毛 琴之下樋爾 嬌哉有匿

他奇なしとして捨てるのも惜しい。

(二二四七) 暇有者 拾爾將往 住吉之 岸因云 戀忘貝

戀忘貝もこの程度に扱ふがよい。

(二二〇九) 人在者 母之最愛子曾 麻毛吉 木川邊之 妹

與背之山

萬葉代に愛せられた妹背の山、これも人口に膾炙する一首である。

(二四〇) 珠匣 見諸戸山矣 行之鹿齒 面白四手 古昔

所念

山は備中、どんな古昔があるか知れないが、面白くして古思ほゆは佳い。

(二七九〇) 客人之 宿將爲野爾 霜降者 吾子羽裏 天之

鶴群

天平五年癸酉遣唐使の船難波を發して海に入らむとする時親母の子を贈る歌といふ、切なる心から出てかく美化されたたしなみのほど思遣られる。

(二八二二) 久方之 天芳山 此夕 霞霏霰 春立下

今日では此夕がちよつと言ひ難いかと思ふ。

(二八三八) 峯上爾 零置雪師 風之共 此間散良志 春者

雖有

春の雪をこんな風によむたのである。

(二八三九) 爲君 山田之澤 惠具採跡 雪消之水爾 裳裾

所沽

裳裾ぬるゝ歌多き中にこれはすぐれた一首である。

(二八六二) 能登河之 水底并爾 光及爾 三笠山者 咲來

鴨

三笠の山は咲きにけるかもはよい、并は花の誤だ。花をどうかして并とよむたのである。サへの語も集中相當見えるが、こゝでは調が弛むでいけない。

(二八八六) 川津鳴 吉野川之 瀧上乃 馬酔之花會 置未

勿勤

萬葉人の愛した馬酔木の花だが歌はいづれもあまり振はない。置未は置土の誤、置土といふ語

を集中によく用ゐてゐる。むぎく土に散らすの意の場合。

(一九六〇) 吾衣 於君令服與登 霍公鳥 吾乎領 袖爾來
居管

此歌の底の心は、霍公鳥の鳴くを聞くで自分の衣を君に著せたくなるといふのである。衣を著せるとは戀ふの意、男の方は女の衣を著る、著まばし、又衣を借らむなどいふ、女から著せまじといふ歌はこの歌の外極めて稀である。この歌は底の心は右に述べた如くであるが、歌の表はさうはいはず、ホトトギスを擬人化して、其ホトトギスが自分の袖を捕へて衣を君に著せよと強要するといふ風に表現した。領の知りするは司配する。(三八〇九) 商變 領爲跡之御法 有者許曾吾下衣 變賜末の領爲をシラスとよむと略同意である。袖に来るつゝは袖を取りて放さないの意。

(二三八四) 我勢古波 幸座 遍來 我告來 人來鳴
來を重ねて面白く調をなしてゐる。まねく來ては來づめに來るの意。
(三三九一) 玉響 昨夕 見物 今朝 可戀物

玉響の憂々を少端のカツカツに利かせたのである。反射形にハツハツとよむもよい、昨日の夕かつかつに見た人を今日の朝にかく戀ふべきものである。

(二四九八) 劔刀 諸刀利 足踏 死死 公依
利はトガリとよまでは調をなさず。
(二六七七) 佐保乃内從 下風之吹禮者 還者 爲使胡粉
歎夜曾大寸

此頃佐保之内は山おろしの風が強くて面向けもならず、往くにも往けないで引かへして還來ては爲むすべ知らず歎く夜が多いといつたのである。佐保の内に住む妹の許に通ふ男の作などであらう。

(二七八六) 山振之 爾保蔽流妹之 翼醋色乃 赤裳之爲形
夢所見管

山振之は爾保布の枕詞、にはふといふと赤のここのやうだが、萬葉は黄にもにはふといふ、黄土をニホフとよます如きである。しかしいづれにして、にはへる妹とは美しい妹のこと、翼醋は

うつろひ易き物のたとへ、これはハナスホウのこと、上の三音をハネスと言かへたのである。此花は櫻につゞいてさく、枝一杯にもみつけるほどに花を著ける、色は赤に青みを混じてゐる。其青みが鴨の羽を思はせるやうな青みだから翼醋といひ始めたものと思はれる。いかにも毒々しく移ろひ易さうな花である。萬葉の歌では翼醋色といつて移らふの枕詞に用ゐるのが多いが、この歌は移らふを其底に隠して其色の赤裳を著た妹の爲形を夢に見たといつたので、そこにこの歌の働きがある。

(三三三三) 莫去跡 變毛來哉常 願爾 雖往不歸 道之長手乎

途中まで見送つてくれた相手に別れて家に歸る途中、若しや相手が引返して来て、歸るのは止めてもう一夜もどまつて行つてはどうかなど言ひて來ないものかと、願み勝ちに歩いてゐると、往けどもくなく家に歸著かない、道の長手になつてしまつたの意、この歌羈旅の部に入つてゐるが羈旅ではない、不歸の一語が此歌の意趣を決定する大切な語だ、自然羈旅の歌と思つてよむと不歸が解らないものになる。

(三三四九) 式島乃 山跡乃土丹 人二 有年念者 難可將

嗟

これは有名な歌、解するまでもない。
 (三八〇七) 安積香山 影副所見 山井之 淺心乎 吾念莫國

昔葛城王が陸奥國に遣され玉へる時國司の取扱が緩怠を極めたので王の御機嫌あしく召上り物も上りまさず、この時前の采女であつた風流娘子が左手に扇を捧げ右手に水を持ち王の膝下に擎けて此歌をよむたので御機嫌がよろしくなつたといふ傳説付の歌、昔は人口に膾炙した歌である。
 (三八三〇) 玉箒 刈來鎌麻呂 室乃樹與 棗本 可吉將掃爲

これと次の二首は卷十六に出てゐる。戲歌の中より標本的に抽出して一興にしたもの、この歌は玉箒、鎌、天木香、棗をよみこむ注文でよみたる歌、玉箒刈來鎌麻呂は鎌を利かせて刈男とし箒草を刈來て箒を作れといつたもの、それでムロとナツメの下を描かむと、うまくとめたのである。

(三八三一) 池神 力士儼可聞 白鷺乃 梓啄持而 飛渡良

これは白鷺木を啄みて飛ぶの題下にもものしたる歌、池神の力士儼といひて、白鷺が杵を啄持ち行司でもしてゐるかに描き出した、なか／＼おもしろいではありませんか。

(三八三八) 吾妹兒之 額爾生流 雙六乃 事負乃牛之 倉上之瘡

これは無心所著歌といつて全く目的のない歌、歌の調はなしてゐるが何をいつてゐるかわからない、そこがかうした歌の身上である。

(二七七八) 夏影 房之下邇 衣裁吾妹 裏儲 吾爲裁者 差大裁

これから以下の五首は旋頭歌である。五七七の歌を片歌といひ、それを二つ合せたのが旋頭歌、恐らく五七五七七の短歌の先形であらうと思はれます。萬葉の旋頭歌はなか／＼面白く、この五首は其面影を傳ふる爲に選出したものであります。右の歌は夏影の濃かな涼しさうな處で衣を裁つ吾妹に、折角裁つてくれるなら少しゆつくりと大きめに裁つてくれよといふのです。房は茂

を見誤つたので夏影の茂きが下でなくてはなりません、裏儲は心を傾けて、こゝは折角とか、親切にとかいふ意味、衣の裏に關する語ではありません。

(二二八二) 橋立 倉椅山 立白雲 見欲 吾爲苗 立白雲

橋立は枕詞、倉椅山は大和、其の山に立てる白雲といつて、自分が見まくるので立てる白雲と追かける處が興味です。

(二二八七) 青角髮 依網原 人相鴨 石走 淡海縣 物語 爲

遠江です。碧海郡についてアチミヅラ、ヅラは面、地面、その郡に依網原といふのがあるのでしよう、名から察して海濱の景色のよささうな處に思へます。そこを來かゝつて誰かよい話相手にはあはないかナアと上の句でいつて、石走る淡海縣の物語せむとつゝけたものです。淡海縣も遠江のことです。

(二二九三) 丸雪降 遠江 吾跡川楊 雖刈 亦生云 餘跡 川楊

これは歌謡だったものでせう。刈つても刈つても生へるといふことが種々の意味に解されて面白いです。

(二二六) 天在 一棚橋 何將行 穉草 妻所云 足莊嚴

天にある一つ棚橋では行きやうもないが、若草の妻がりとなら何の用意も要らない、早速に足で出かけるといつたのです。足莊嚴はちよつとよみ苦い字ですが、莊嚴のイカメシをユカマシに利かせたものです。

(三三四八) 奈都素妣久 宇奈加美我多能 於岐都渚爾 布
瀬波等杼米牟 佐欲布氣爾家里

上總海上郡の海、海上潟、この海には沖に渚があるのが皆に知られてゐる特徴でしたから、歌もそれを主にして船はとどめむ、小夜ふけにけりの情をつないだものです。この方面の歌謡だったのです。非常に澄切つたよい調をもつてゐます。東歌中の代表作といつて過言ではありま

すまい。
(三三五二) 信濃奈流 須賀能阿良野爾 保登等藝須 奈久

許惠伎氣婆 登伎須疑爾家里

これも歌謡です、信濃奈流は土地表示でもありますが、東歌では枕詞です、須賀能荒野といふのは諏訪からつゞく谿谷らしく杜鵑溪といふのが今もあるさうです。ホトトギスの名所ともいへる處だつたのでせうが、須賀能阿良野といふ名も荒涼味を帯びた實によい名です。登岐須疑の語は上のホトトギスの音内より持つて来て音的に相響させたので、それで季節の移りをいつたのです。これも實に名歌です。東歌には名歌が此他にも澤山ありますがそれを拾つてゐると、とても百首選は成立ちませむので僅かに以上の二首を代表歌とし、次に君が代を奉祝した歌の中での最古形と思はれる次の一首をあげることになりました。

(三四四八) 波奈知良布 己能牟可都宇乃 乎那能乎能 比
自爾都久麻提 伎美我與母賀母

古くは花散らふは美しい景色なのでした。後の如く散るを忌むなどいふことはなかつたのです。向つ丘の乎那といふ丘がだんだん減つていつて海中の泥の低さになるまで君が代といふので、後では天の羽衣稀に著て撫つとも盡きぬ巖といったのと同じ趣向のことをいつたのです。ち

よつと申添て置きますが君が代の長久をいひあらはすに多くの歌はこゝの二歌のやうに山が滅つて海中の泥とまで低くなるとか、巖が減らないとかいふやうに消極的の喩をとる中に、今の國歌のみはさゞれ石かふくれ巖となつて苔が蒸すところまで積極的にいつてゐる、こゝが國歌としても目出度い所以であると信じます。

(四三二八) 於保伎美能 美許等可之古美 伊蘇爾布理 宇
乃波良和多流 知知波波乎於伎豆

東國は古くは天皇直屬の武人の國でありました。彼等は大臣の御爲とあれば家も身も顧みず御楯に召されることを本分としてゐました。防人歌中に、大君の命畏み、さへなへぬみことにしあれば等の語が多く見られるのも其故であります。この歌も其一つ、みことのまゝに父母を置きて石に觸り危険なうのはらをも顧みなくゆくといふのです。

(四三三六) 知知波波我 可之良加伎奈豆 佐久阿禮天 伊
比之古渡婆曾 和須禮加禰津流

平凡とおいひですか、しかし人が至情に徹するときこの言葉ほど強く撃つて來る言葉はなくは

ないでせうか。

(四三五五) 余曾爾能美 美豆夜和多良毛 奈爾波我多 久
毛爲爾美由流 志麻奈良奈久爾

難波鴻をゆくと、行手に島々が見える、その島々をよそにのみ見てゆけやうか、其島々は雲井の空に見える我世の外の島々ではなく人の親も人の子も妻も背も我等同様に住居してゐる島々なんだ、それが懐かしき思に見入らずにをれるものではないといふのです。雲井に見ゆるといふ言葉を見落してはなりません。

(四三七三) 祁布與利波 可敵里見奈久豆 意富伎美乃 之
許乃美多豆等 伊渥多都和例波

實に立派な武人の言葉です。
(四三七五) 麻都能氣乃 奈美多流美禮婆 伊波妣等乃 和
例乎美於久流等 多多理之母己呂

麻都能氣は松の木、奈美多流美禮婆は並びたるを見れば、伊波妣等は家人、和例乎美於久流等

は吾を見送ると、多多理之母己呂は立てりし如くであります。旅行く道の木立にも家人をしのぶ、何といたいたしいなげきでせう。

(四三八〇) 奈爾波刀乎 己岐渥且美例婆 可美佐夫流 伊古麻多可爾爾 久毛曾多奈妣久

悲しい中にもかうした嚴肅な心持を持合せてゐる防人でした。

(四三八四) 阿加等岐乃 加波多例等積爾 之麻加積乎 己積爾之布爾之 他都積之良受母

曉の薄闇に鳥かけを漕いでゐた船は今はどこを行くやら、明日は己も斯く思はれる人の仲間には入るのだ、何と餘音の長い歌でせう。

(四四〇一) 可良己呂茂 須曾爾等理都伎 奈苦古良乎 意伎且曾伎怒也 意母奈之爾志且

母なく己をのみ頼る子等の裾にとりつき泣くをも振切つて來ぬやとなげく、全くの酸鼻です。

(四四一三) 麻久良多之 己志爾等里波岐 麻可奈之伎 西呂我馬伎己無 都久乃之良奈久

枕太刀腰に取佩きまがなしきつまの罷來む時の知らなくです。東人の家庭の嚴肅な奥床しさを偲はせる歌です。

(四四一九) 伊波呂爾波 安之布多氣騰母 須美與氣乎 都久之爾伊多理且 古布志氣毛波母

家呂には蘆火焚けとも住よきを筑紫に至りて戀ふしくもは、蘆火たく貧しき家族の親しみこそまことの慰めなるものを旅に出たらごんなにか偲はれることであらうといふのであります。

(四四二五) 佐岐母利爾 由久波多我世登 刀布比登乎 美流我登毛之佐 毛乃母比毛世受

防人に行くのは誰か夫かと問ふ人を見るとさういふ人になつたらさぞ物思もなくてよいだらうと羨ましくも思はれるといふのです。景あり情あり。さすがに昔の防人の名作となづかれます。

(四四二五) 宇麻夜奈流 奈波多都古麻乃 於久流我辨 伊
毛我伊比之乎 於伎豆可奈之毛

廐なる繩斷つ駒の遅くるがへ、妹が結びしを置きてかなしも、いひ廻しの巧みな一首です。妹
が結びし廐の繩なるものをと思へば、それを断つて駒をひき出す手も遅れがちになるといふので
す。伊比之は由比之と共に結です。

(四四三六) 夜末乃欲能 由久佐岐之良受 由久和禮乎 伊
都伎麻佐牟等 登比之古良波毛

闇の夜の行先知らず行く吾を何時來まさむと問ひし子らはも、闇の夜のは枕詞です。かうした
有心と無心との對立する悲劇は最美しい悲劇ではないでせうか。

提 唱

月の光も粗末にはしますまい。
わが國のありがたい古さを新しく生かしませう。
海山の間に見捨てられたものを見出して利用しま
せう。
簡素で住みよく、着ごこちよく、また質素でおい
しい食事をしませう。
歌もうたひ、俳句も咏み、繪も、書も楽しんで生
活をよくしませう。

日本に還れ
月 明 會

表紙に就て

本文庫の表紙は信州産の「和紙」の一種で「桑」の樹皮（養蠶の副産物）を原料とし、「とろろあふひ」（錦葵科）の草根の粘質を利用して手漉されたものであります。しかも、すべて秋冬、月明の山村の副業的手工藝生産品で、まさに「月明・山家紙」と稱呼するものであります。

此文庫にこれを使用するのは、また本會の「提唱」を行爲する所であります。

月文明庫

昭和十七年三月廿日印刷
昭和十七年三月廿五日發行

不許
複製

萬葉百首選

定價 五十錢

著者 中村 烏堂

發行者 東京市赤坂區榎坂町四番地 山崎 斌

印刷者 東京市芝區蒲松町一丁目十五番地 星野 忠作

タス印刷株式會社

發行所

東京市赤坂區榎坂町四番地

月明會出版部

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

電話赤坂(48)三一四〇番
振替口座東京一六〇九七七番
會員番號一〇九〇二九番

423
457

生活文化の本

月明文庫

定價各册五十錢
送料各册三錢

新刊

雪の障子	山崎 斌 編作
月明健康談	小澤 覺 輔 著
凡兆句集	月 明 會 編
萬葉百首選	中村 鳥 堂 著
日本の菓子	山 崎 斌 著

近刊

防人の歌	中村 鳥 堂 著
喰べられる草木	水野 葉 舟 編
伊那谷の民謡	下平 謙 一 採譜
季節帖	月 明 會 編
月明・華道	水谷 川 忠 磨 著
月明・茶道	月 明 會 纂
草木染の仕方	山 崎 斌 著
かてもの集	月 明 會 編

〔以下續刊〕

終

生活文化の本